

概 要 報 告

実施期日	8月 1日 (木)
部 会 名	小学校 家庭部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『より良い生活を創り出そうとする力を育てる家庭科教育を目指して』

提案概要

本研究は、日常的に食べているごはんとうま汁の学習から、和食の基礎を学び、さらにフードロスへとつながる「捨てないレシピ」の学習へとつなげていった。

まず、味噌汁を作る際の出汁とは一体何なのか、というところに児童の興味関心が向くように授業の工夫を行った。数種類の味噌や出汁を味見したり、鰹節本体に触れたり削ったり、透明ガラス容器に入れて出汁が出る様子を見られるようにしたりと、児童が五感を使って主体的に学習に取り組めるように工夫した。

次に出汁を取った後の「だしがら」からふりかけを作り、これを「捨てないレシピ」として学習した。この学習を生かして「着なくなった服を捨てるのではなく、譲ったり売ったりする」ことや「ジャガイモの皮を捨てずに油で揚げて食べる」など、自分の生活に生かす児童もいた。

また、栄養士との連携も指導の工夫の一つであった。出汁についての学習では、より専門的で深い話をしてもらうことにより、和食という日本の文化にも触れさせる機会となった。

質疑応答

特に出なかったが、この後のグループ協議で活発な意見共有がなされた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱はA「技能教科に対話は必要か ～深い学びにつながる対話のあり方～」とB「題材のつながりをどうつくるか」の2つが提示され、どちらを協議してもよいこととした。協議グループは小学校教諭、中学校教諭の異校種合同の1グループ4人で構成された。

A「技能教科に対話は必要か ～深い学びにつながる対話のあり方～」

【必要】

- ・グループ活動を取り入れると対話が生まれる。一人でやるには限界があり、友だちとアドバイスをし合う中で、自分の考えがブラッシュアップされていくから。
- ・対話を通して、個の課題解決や教え合いを通して信頼関係を築くことにつながる。
- ・技能習得に必要といえば必要だが、それは教え合いであって対話や深い学びとは異なるのではないか。
- ・対話をさせていく中で、思考の広がり生まれる。
- ・「どうしてここはこういう縫い方をするのか～」など説明させることによって、評価する際の判断材料にもなる。
- ・言葉にしていく過程で、深まっていくのではないか。こうしていくことで次につながる。
- ・自分の考えと人の考えが異なるときに違いに気付く。

- ・体験をした後に対話をしていくことで、対話の中から子ども発信の学習課題が出てくる。また、各家庭の違いなど、対話していくことで他者理解につながる。
- ・子どもの実生活の差は家庭科ではよく出てくるので、対話によりいろいろな家庭のあり方を知る機会となる。
- ・対話をするタイミングと内容が大事。例えば、設計段階では考えたものを共有し、実践では教え合い、振り返りでは意見交換をすることで、PDCAサイクルが実りあるものになる。
- ・言語化することが難しい子には気付きの場面となる。ただ、対話をするためには素地が必要であり、限られた時数の中では難しい。
- ・「なんで」「どうだった」は授業で時間を作る必要がある。「何のために」と考えて活動していくこと必要で、その積み重ねが成長につながる。

【あまり必要ではない】

- ・対話が必要なレベルまでの基礎技能が身に付いていないため。また、それまでの人生経験では対話に深みがないため。振り返り、思考する場面など対話を取り入れるタイミングが大切である。まずは作業を通して、それぞれが技能を高めてから、対話を入れるのがよいのではないか。
- ・基礎基本がないと、対話をさせている雰囲気だけで中身がないのではないか。何のために対話をさせているのかが大切である。
- ・対話に配慮が必要な児童も多いので、ただ話合いの場面を設けるだけではよくない。
- ・一人で製作するときに対話をするのは危険である。

B「題材のつながりをどうつくるか」

- ・題材ごとに切れてしまいがちだが、大きなテーマで捉えていくといいのではないか。
- ・家庭科でいうと、5年生で基礎、6年生で深めていくイメージなので、題材ごとに経験を積んでいくことが大事。
- ・時間の融通の利かせ方など、小中で異なる。
- ・つながりを持たせたいが、例えば技術分野で、自分でプランターを作り、そのプランターを使って植物を育てるとなると子ども発信ではなく、こちらが意図して与えた教材を使い、押しつけの授業になってしまうのではないかという懸念がある。
- ・他教科との合科や給食との連携など考えられるが、時数の問題がある。

多くのグループでAについて協議がなされた。はじめは「対話は必要」というスタンスで話し合い始めたが、タイミングや内容によって教師側が仕掛けなければ、深い学びにつながらないのではというような声が多く聞かれた。Bについては、協議したグループもあったが小中での違いも大きく、時間的に情報交換が主となった。

まとめ概要

本研究は味見の際「みそは嫌いだけど、みそ汁は好き」と発した児童の意見をきっかけに、授業を展開していった。もし「出汁とは…」と教師による一方的な授業だったら、児童からの発言はなかったかもしれない。実体験からの対話は、教師が対話の場面を設けなくても子どもの心が動いたときに生まれる。協議を通して、教師は「対話」「会話」「話し合い」の違いを意識した上で、「対話」させるタイミングや目的をもって授業を組み立てる必要があることが見えてきた。また、家庭科の学習は誕生から老後までの暮らしや生活にそった内容である。今回の提案は「捨てないレシピ」として食生活から衣生活、住生活へと、題材のつながりをつくることができる一つの例となっている。